テレスキャン

●ミミ号の第２の航海

アメリカで大きな反響を呼んだ「ミミ号の航海」の第２シリーズの制作状況を知るために，５月２２日に筆頭プロデューサーであるサムエル・ギボンシ氏に会った。第２シリーズも第１シリーズ同様，４年生から８年生を対象にしているが，第１シリーズが学校用のマルティメディア教材であったのに対し，第２シリーズは家庭用のマルティメディア教材として作成されている。第１シリーズは，児童に身近な現象を通して理科と算数への興味を持たせるを目的にしていたのに対し，第２シリーズは情報を処理するということはどういうことなのかということと，情報に対する態度を教えることが目的である。

第２シリーズのテレビ番組もドラマとドキュメンタリー部分の２部構成になっている。今回も，前回と同じ男の子が主役で，今回は，副主役として黒人の女の子が登場する。ミミ号がユカタン半島の古代マヤ文明を調査するためにチャーターされる。マヤ民族は，非常に活発に海洋貿易を行っていた。そのことは，海底からマヤの遺跡が発見されることで推測される。主人公の男の子は，スキューバー・ダイビングの先生から潜水の手ほどきを受け，水圧などを体験して圧力の概念を理解して行く。前回も，身体障害者が登場していたが，今回も登場する。ギボン氏の説明によると，アメリカでは聾唖者は頭が悪いと思われているので，あえて知的人物の役で，本当の聾唖者を前回出演させたということである。今回は，身体障害者は活動的でないと思われているので，スキューバー・ダイビングの先生の役は片足の女性が担当している。現実の彼女は，かつてアメリカのスキー・チャンピオンであったが，スキー選手の命とも言える足を癌で片方なくした。障害

を克服して実生活でもスキューバー・ダイビングの先生をしている。番組では，本当の考古学者が二人登場して，マヤ文化の宝といわれるパレンケの街を中心に物語が展開する。既に撮影は終了し，編集段階に入っている。第3回のドラマ部分ラフカットを見せて頂いたが，第1シリーズよりもドラマチックな印象だった。

既に，コンピュータ教材の試作品は完成し，修正のデータを得るために全国の学校で使用してもらっている。コンピュータ・ソフトウェアとしては「マヤ計算機」という教材を見ることができた。マヤ文化は２０進法を利用しており，０も発見していた。しかし，通常の文字はすぐに考古学者が解読したが，数字の単位はなかなか解けなかったということである。そういった考古学者の思考の過程を辿ることによって，現在利用している１０進法や２進法の原則を理解していく。また，このソフトウェアには２０進法のマヤ暦が入っていて，マヤ暦のバースデイカードを作れるようになっている。前回には，世界初の学校教育用ＭＢＬ(Microcomputer Based Labaratory)，バンクストリート・ラボラトリーと銘うたれた実験キットが開発されたが，今回はその改良版を用いることになっており，圧力計が付加される。

１９８８年秋からＰＢＳ系で放送が開始される。第２シリーズと平行して開発されているＤＶ－Ｉ(Desital Video Interactive）の教材については，次回紹介する。

●キッドネットの中断

子どもたちに科学的な情報をパソコン通信で送るという「キッドネット」計画が，ＮＳＦ(全米科学基金)からの援助を得て，実験的に実施されていた。「キッドネット」は，ワシントンＤＣ，ユニオン・ステーションそばの「首都子ども博物館」に本部があった。

キッドネットは，首都子ども博物館が計画していた子ども博物館を結ぶコンピュータ通信ネットワークで，この計画を提唱した担当者が博物館

を退職したため，この計画は終了してしまったということである。キッドネットについては次のような紹介の文章が，現在でも博物館の壁にかかっている。

「キッドネットは首都子ども博物館にできる予定のコンピュータ通信システムです。キッドネットが稼働すれば，大型コンピュータを通じてメッセージを送ったり，外の博物館のお客さんの中からあなたと同じ興味を持ったペンパルを捜したり，展示物についての情報を入手したり，子ども博物館に自己紹介を掲示したり，電子的に議員に手紙を送ることができるようになります。

キッドネットは，博物館の中の２５以上の端末を結ぶコンピュータ・ネットワークです。いつの日にかは，同じネットワークが全米のオフィスと家庭を結ぶことでしょう。

キッドネットは，ＤＥＣから寄贈された２５万ドルのコンピュータを運営するための５万ドルが獲られたら稼働します。」

子ども向けテレビ番組の情報をパソコン通信で流しているキッズネット（ Kids Net）いうパソコン通信サービスもあるが，キッドネットとはまったく異なるものである。キッズネットについては，別の機会に紹介する。

●ピンクディスク

アメリカでは，ビデオディスクの制作費が日本に比べて格段に安い。日本では，カッティングに３週間と２００万円くらいかかるところが，２日と２０万円だ。しかし，それでもこの価格では試作するということができないというので，品質は悪いが300ドル（５万円以下）で制作してくれる会社が増えている。こういった速成の安価なビデオディスクのことを「ピンクディスク」と呼んでいる。ピンクディスクによって，個人でもビデオディスクが制作できるようになった。こういったインフラストラクチャーが，ビデオディスク教材を豊かにしている。

●ソフトウェア・ランキング

インフォコープ社の調査によると，上位１０位までの市販ソフトウェアの市場占有率は次のようになっている。

		売上	本数
1.	１－２－３	１６％	１１％
2.	ｄＢａｓｅ III	１５％	８％
3.	Wordperfect	９％	７％
4.	Applework	８％	９％
5.	Microsoft Word	６％	５％
6.	Microsoft Excel	４％	３％
7.	First Choice	３％	５％
8.	Microsoft Works	３％	４％
9.	Print Shop	１％	３％
10.	Omuni III	１％	0.5％